

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふりがな 氏名	ちゅうじょう たけし 中條 健志
(研究テーマ名) 国家による「移民」の歴史化に関する研究 —フランス国立移民歴史館設立をめぐる議論を事例に—	
(研究活動実績) <p>前年度は、ROV プログラム (2012 年 2 月 8 日～4 月 10 日) における在外研究で収集・調査した資料の整理・分析をおこなったが、今年度はその結果の公表がおもな研究活動となった。はじめに、5 月 12 日におこなわれた大阪民衆史研究会において、「フランスにおける『移民』の歴史化—国立移民歴史館設立をめぐる議論の分析」という題目で口頭発表をおこない、移民歴史館設立までに発行された政治家・研究者による報告書を談話資料として、そこで「移民」がどのような存在として語られてきたのかを明らかにした。また、歴史館の展示方法、すなわち、国立の機関が提示する仏移民史についても紹介した。</p> <p>7 月 29 日からは、頭脳循環プログラム (「EU 域内外におけるトランスローカルな都市ネットワークに基づく合同生活圏の再構築(2012 年度～2014 年度)」) のもとでの研究活動を開始した。9 月 26 日までの最初の滞在期間では、移民歴史館における資料収集および読解、関連する学会・研究会への参加、また、資料分析のよりどころとなる批判的談話分析 (CDA) の理論にかんする先行研究の考察をおこない、10 月 19 日に国立ソウル大でおこなわれた日本フランス語教育学会秋季大会 (韓国フランス語フランス文学教育学会との共催) における口頭発表の準備をすすめた。そこでは、<i>Mémorisation de l'« immigration » en France - Analyse critique du discours sur la fondation de la Cité nationale de l'histoire de l'immigration</i> (「フランスにおける『移民』の記憶化—国立移民歴史館設立をめぐる批判的談話分析」) という題目で報告をおこない、5 月の研究発表の内容をさらに深める形で、移民歴史館設立までの報告書のなかで「移民」にどのような意味が付与され、それがどのように歴史館の目的と結びつけられているのかを明らかにした。ここでの発表内容は、日本フランス語教育学会の学会誌『<i>Revue japonaise de didactique du français</i>』(第 9 号) に論文として投稿した (現在査読中)。</p> <p>12 月 22 日にはふたたび同プログラムのもとで渡仏し、移民歴史館での研究活動、関連学会・セミナーへの参加のほかに、受入教員である国立社会科学高等研究院のセルジュ・ポーガム教授の著書 <i>Les formes élémentaires de la pauvreté</i> (『貧困の基本形態』) の翻訳作業を、同教授の指導の下、文学研究科の川野英二准教授とともにすすめている。</p> <p>また、前年度の研究成果として、論文「OIF (フランコフォニー国際機関) とベルギー」『「ベルギー」とは何か?—アイデンティティの多層性—』(岩本和子・石部尚登 [編] 松籟社) が 12 月に刊行された。</p>	